
きせき

柊 雪華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きせき

【Nコード】

N9404P

【作者名】

柊 雪華

【あらすじ】

堺朱里は、職場の先輩である緋月智也に二年間の片思い中。

初恋に戸惑い、更に天然ボケが重なりにつちもさつちもいかない状態の朱里を見かね、

同僚の相川早苗と下田美紀はいかにして朱里と智也を「くつつける」か思案するが……。

自サイト「こくりこれっど」より再掲載 <http://ameblo.jp/coquelicot>

第1章

——今日もわたしは、緋月さんに夢中。

そして、それを伝えられないまま、毎日が終わってしまうという才子。

堺朱里、20歳。就職2年目。只今、絶賛恋愛中。

その相手たるや、彼女と同じ課に勤務する、緋月智也という男。今年31歳になったというのに、まだ20代と言っても通じそうだ。180センチを越える長身に広い背中、金縁のメガネがよく似合う。冷静沈着頭脳明晰、彼はいつでもどこでもこう評される人間だった。朱里が採用前の挨拶のため、事務所を訪れたときに一目惚れ。それ以来、ずっと彼女は緋月に夢中。彼女自身も事務所では最年少、職員達のマスコットの存在であり、言い寄る者は後を絶たないが、彼女には緋月しか目に入らないのだ。

片想い二年目。見ているだけで幸せなのに、声などかけられてしまったら、恋愛に不慣れな朱里の脳は急激に沸騰してしまう。

「堺さん、堺さん」

「はうっ！」

と、当然今は仕事になわけである。しかもこの落ち着いた声は、疑いようもなく、緋月である。

「またぼーっとしてるんですか。ちょっとお願いしたいことがあるんですが、いいですか？」

「は、はい」

そう、彼はいつでも誰にでもどこか低姿勢。税務という職務柄なのかもしれないが、彼女は緋月のその口調さえも好きだった。

「この図面、コピーしていただけますか？」

「わかりました……あの、いつまでに終わらせればいいですか？」

「すみません、急ぐので今日中にお願ひできますかね」

「はい、わかりました」

ということで、緋月が巨大な図面を渡す。時にA2サイズでもコピーしきれないような巨大な図面をコピーし、繋ぎ合わせるのは非常に面倒極まりない作業だ。小柄でドジな朱里だが、そういった雑用を嫌だとは決して思わなかった。元来奉仕心が強いからだ。それに、緋月からの頼みとあればどこに断る理由があろう。

繰り返すが、図面は巨大だ。折りたたんでやつとA2サイズ。普通のコピー機ではコピーできない強情な奴である。にもかかわらず、その図面の下で、偶然に緋月の手と朱里の手が重なった。

緋月の手は、やはり大人の男の手だ。一見冷たそうなのに実はとてもあたたかく、朱里は少しだけ、嬉しくなった。が、嬉しい、だけでは終わらない。直後にいきなり恥ずかしさが彼女の全身という全身を駆け巡る。

「はうっ！」

反射的に手を引っ込めたら、支えるものを失った図面は当然派手に落下。

「どうしたんですか？」

さして気にする様子もなく、緋月はしれっと言う。彼はいつもこうだ。まさに、冷静沈着。

—— やっぱりわたしは緋月さんからしたらまだ子供なのかなあ。

年齢差、11歳。まして朱里は数ヶ月前に成人したばかりなのだ。不安になるのも致し方ない。

「い、いえ、なんでもないんです」

なんとか図面をひろってその場を取り繕うが、果たしてうまく誤魔化すことができたのだろうか。

「じゃあ、お願いします。お忙しいところすみません」

「いいえ、わたし、今日はそんなに忙しくなかったので大丈夫です」
文字にして並べると普通に喋っているようだが、実際には少し間延びした、のんびりした口調。これも、彼女を子供っぽく見せる要因かもしれない。

「ねえ、ずっと思ってたんだけどさ。朱里ちゃん、緋月さんのこと

好きでしょ」

午前中はひたすら図面のコピーをとり、時々やってくる来客の応対などでアタフタしている間に終わってしまった。こんな日の昼休みはまさに至福、なのだが、先輩の相川早苗と下田美紀が満面の笑みで聞いてきたものだから、気が休まるわけがない。

朱里はこの二人とは去年からとてもよくしてもらっている。一緒に昼食をとるだけでなく、プライベートでもたまに遠出などしたりするほどだ。

「はわ、え、その、何でわかったんですか？」

「ほーらやつぱり」

クスクスと笑う二人。やつぱり、ということは、二人とも知っていたのだ。もつとも、なんとなくそう思っていたところに、朱里の「何でわかったんですか？」でとどめをさされた感じではあるが。「そうだろうなって思ってたのよ。明らかに智也君といると態度違うもの」

緋月を「智也君」呼ばわりしているのは、下田美紀。5年前に学生結婚しているだけあり、恋愛沙汰にはめっぽう強いようだ。

「だって恥ずかしいじゃないですかー」

「だからってそんな意識しなくてもいいじゃない。かえっていづらくない？」

「そんなことないですよ、だって緋月さんですし」

「つかー可愛い、堺さんホント可愛いわ！」

などと実に男らしいコメントをしてくれるのは、相川早苗。彼女は下田と違い、職場恋愛の末に結婚した経験の持ち主。一度以前の職場を結婚退職したあと、この事務所で臨時職員として働いているのだ。

「そ、そんなからかわないでくださいよお……」

「からかってないわよ。にしても……緋月さん不思議よね。もうすぐ31になるってのに女つけないんだから」

「ええっ!？」

心底驚く朱里。失礼な話ではあるが、緋月ももういい年である。多少女つけがあっても不思議ではないと思っていたし、実際、彼女の一人や二人（まさか二人はないだろうが）はいるとも思っていた。見事に、いい意味で期待を裏切られた形になってしまう。

「あれ、知らなかったの？ 朱里ちゃん。智也君今年の11月で31歳になるのよ」

「いいえ、あの、そうじゃなくて。お歳は知ってましたけれど……」

「ああそうか、じゃあそれか。彼女とかはいないみたいよ。前にチラッと聞いたもの」

「じゃあ、わたしにも……」

「そーいうこと」

相川がトンカツ定食の千切りキャベツに箸を伸ばしながら答える。口調も男前なら食べるものも男前である。

「ちよつと頑張ってみなよ。今度の飲み会でチャンスあげるからさ」
「は、はい！」

ちようと再来週には、職場全体での忘年会が行われる。職場全体とはいえ、この事務所の「職場全体」などたかが知れたものである。まして上席の者以外は席順も特に決まっていないのが定例である。つまり、朱里にも緋月と話すチャンスがあるということなのだ。このチャンス、逃すわけにはいくまい。

—— 緋月さんに彼女さんがいないのなら、わたしがなるしかないじゃないですか！

朱里の決意は固まった。緋月の背中を追い続けて2年間。いい加減この片想いに終止符を打とうではないか、「職場恋愛」という名の終止符を。「失恋」などという終止符は断固拒否、である。

第2章

一度そう決めてしまうと、その日は思いのほか近くなるもので。ホテルの和室の宴会場に、同じ事務所で仕事をしている者が続々と集まる。緋月はまだ到着していないのか、朱里の右隣には相川、斜め向かいには総務課長の藤田、そして朱里の真向かいには下田がいる。朱里の左隣の席はわざと空けておいている。

やがて、緋月の姿が見えると、即座に相川が動く。

「あ、緋月さんこっちどうぞー」

「ありがとうございます」

そう、これこそが二人のくれた「チャンス」なのだ。

いつもの穏やかな微笑で、緋月が朱里の左隣へ。驚く朱里に、下田がにつこりしてみせる。勿論緋月にはわからないように。

「あ、お疲れ様ですー」

「堺さんこそ」

それ以外に、何を言っているのかわからない。チャンスを逃してしまいそうですわすわしながらも、幹事の挨拶が始まった。忘年会の始まりである。

「例えばしいたけひとつとってもそうですよ。他の人にはおいしいかもしれないけど自分には合わなかっただけ、そういうことです」
「ってことは緋月さんしいたけ嫌いなんですか？」

「堺さんも変なこと言いますね。僕、食べ物に関しては好き嫌いないですよ」

これが飲み会の際の緋月の口癖だ。いつも突拍子もないことを言う朱里へのツツコミ。これこそがこの事務所の飲み会での定番。

このようなことを言われるのは、朱里は嫌だと思わない。もっと言っほしいほどだ。だって相手は大好きな緋月なのだから。

「なんか緋月さんと朱里ちゃん、入る隙間もないわね」

隣で朱里をこづいてくるのは相川。もちろん、これも相川たちの計算どおり。朱里があたふたしている間に、計画は順調に進んでいた。

「お、じゃあどうだ」

と、そこで話題に入ってきたのが総務課長たる藤田。そんなに飲んでいないはずなのにすっかりへべれけになるのもいつものことで、いい意味でも悪い意味でも言いたい放題になってしまう。これも、この事務所の飲み会では定番だ。

「緋月さん、せっかくだし堺さんのこと嫁にもらったらどうだ」

「ええええっ!？」

一番奥に陣取っている者がこちらを見る程の大声を上げてしまう朱里に比べて、緋月は実にあっさりとした反応を示す。さすが、どの事務所に行っても冷静沈着と言われるだけある。それに、今日の緋月はいつもに比べてあまり飲んではないようだった。

「そんな、堺さんがかわいそうですよ。堺さんから見たら僕なんておじさんです」

——え？

一瞬、ビールのジョッキを唇に当てたまま、朱里が硬直した。

——わたし、子ども扱いされてる？ わたしは緋月さんが思ってるほど子供じゃないのに。こんなに緋月さんのこと好きなのに。

「朱里ちゃん？どうしたの？」

「は、はうつなんでもないですっ」

どうにかその場を取り繕い、唇に当てていたジョッキを傾け、一気に中身を飲み干してしまふ。急にかあつと全身が熱くなった。自分がアルコールに弱いのはわかっていたが、止められなかったのだ。「ちょっと待ってください、堺さん。貴女アルコール弱いでしょう」

緋月がそう宥めるのも、耳に入らない。次々にビールをはじめ、日本酒、カクテル、焼酎水割等々、大酒飲みの藤田が喜びそうな勢いでどんどん出された酒を消化していく。

「もう弱くないです！子ども扱いしないでください！」

そう言っている自分が一番子どもなのはわかりきっているのに、その手も口も止まることはない。結局彼女は半ば強引についていった二次会の途中でダウンして、家の方向が同じだという緋月に背負われて帰ることになった。

「……」

雪道を歩くのにはいつでも北国の人間は気を遣うが、今の緋月は常人の三倍ほど気を遣っていただろう。

自分も多少ヤケ酒してしまったのが災いして、いくらかふらついていたので、先に潰れてしまった朱里を送ることを口実に先に帰らせてもらうことにしたのだ。

足元がおぼつかない。いつもなら、いつもの緋月ならそんな無茶な飲み方はせず、程ほどのところでセーブするはずなのだ。なのに、なぜ今日に限ってこんなにふらついているのだろう。

おそらくは……。

「子ども扱いするなって言われても形無しでしょう、堺さん。ちゃんとつかまってくさいね」

返事はない。まさに「潰れた」というにふさわしいほど、朱里は深い眠りに落ちていた。息をしているか確かめなければ不安になっってしまうほど、彼女は実によく眠っていた。その眠りの質はアルコールのせいで決してよいものではないはずだが。眠っている、というより意識を失っている、というほうが正しいのかもしれない。

そんな彼女を背負って、自分も千鳥足の状態で、雪道を歩くのだ。常人の三倍ほど気を遣うのは至極当然のこと。

「……」

緋月の頬はほんのり赤みがさしていた。アルコールのせいなのか、身を切るような寒さのせいかわからない、それとも長いこと触れることがなかった女の身体に触れているからか。

大学を卒業する直前に恋人に別れを告げられて以来、恋愛というものへの欲求が急速に萎んでいった緋月。もちろん仕事がよくでき

て、更にスタイルもいいし顔もいい、丁寧な対応になびかない女はいなかったのだが、誰も緋月にはぴんとこなかったものだった。

朱里もそのような女の一人、のはず。そんなことは言われなくともわかつている。彼女の態度を見れば歴然だ。非常にわかりやすいまさに初恋とでもいわんばかりの反応をするのだから。まして彼女はまだ20歳になったばかり、恋に恋する年頃、というのもそんなに言い過ぎではないかもしれない、緋月自身もそうだったから。

他の女と同じように、自分の外面しか見ていないのだろう。まして恋に恋する年頃、彼女が見ているのは「緋月智也」そのものではなく、「恋とはどのようなものなのか」なのだろう。そう思い込むことで、緋月は朱里の思いを懸命に否定しようとする。

しかし、コートごしに触れるその身体はまぎれもなく大人の女のそれだ。緋月にはない柔らかさ、長い黒髪からときどき零れる甘い香り。そして……意識しないように努力はしているのだが、彼女の胸。背中に押し付けられる格好になるし、しかも彼女の幼い外見とは裏腹に結構なボリュームがあるものだから、男としてはどうしても、反応してしまうのも無理はない。抱えた腰も壊れそうなほどほつそりとしていて、否応なく彼女が子供でないことを意識させられてしまう。

「子供じゃない、子供、ですか」

緋月の頬が緩む。朱里の住む部屋はもうすぐそこだ。明日は土曜だから、仕事は休み。ゆっくり酔いを醒ましてもらおう。月曜の仕事に支障が出ては困るから。

第3章

月曜日。さすがに土日が休みだと、酒に弱い者も翌日まで響く者も体力を相当回復させられる。いつもどおりの時間に、いつもどおりのメンバーが事務所に揃う。しかし、いつも一番のりで事務所に来ているはずの朱里が、来ていない。いつもならば、自分の次に早く来る緋月に何かしらいいところを見せようと、仕事や事務所の掃除などに精を出しているはずだが。

これには下田と相川も首を捻り、ちよつと緋月が席を外すと、それを下田が追いかけていった。聞きたいことなどひとつしかない。

「智也君、結局朱里ちゃんは無事に送り届けたのよね？」

「あ、ええ。ただ鍵を閉めずに帰るわけにはいかなかったの……あれ、合鍵ですよね？助かりました」

いつもの智也らしくない、要領を得ない返事だった。何が言いたいのかわからない、のらりくらりとした返答だ。まさか金曜の酒が今も残っているなどということはないだろう。いくら彼が金曜に飲みすぎたからといっても。

「なんだか今日智也君、変よね……？」

「え？」

「いつもならもつと落ち着いてるのに、なんだかそわそわしてるっていうか。どうしたの？」

瞬間、智也の頬がかつと熱くなった。動揺も朱里を心配しているのも全て読まれていたのだ。下田は聡い。特に男女関係に関しては。

「いえ、特に何も……」

「あ、おはようございます」

必死で弁解しようとする緋月、そして詰問する下田の横を、ピンクブラウンのふわりとした巻き髪の女性が通っていく。見たことのない女だが、その声には二人とも聞き覚えがあった。

外に出て、駐車場を確認する。それまでなかった白いインテグラ

が停まっていた。そういえばさっきの女性のコートも真っ白なピーコート。

間違はなく、さっきの女性は堺朱里。

無駄話などしている余裕など、緋月にも下田にもない。事務所に急ぎ足で戻ると、職員達も朱里の変化に呆然としているようだ。日本人形のようなと絶賛されていた黒い長い髪はもはや跡形もない。規定ギリギリまで明るくした、ピンクブラウンの柔らかな巻き髪を下ろしている。いつもならばその髪を後ろでひとつにまとめているはずなのに。服装もいつもの女性らしいピンクや白を基調にしたものではなく、出張でもないのに黒いパンツスーツをしっかりと着こなしている。

「堺さん、その髪……」

「昨日ちよつと美容院に行ってきたんです。気分を変えたかったの
で」

心なしか、口調さえいつもよりしつかりしている。語尾が延びていないし、ぼんやりした喋り方ではなかった。

「智也君。これってもしかして……」

「ありえますね」

二人は意味ありげに頷き、そのまま一日彼女の様子を見ることにする。

「あ、堺さん？」

「はい」

これも観察の一環。少しドジな朱里がどのような反応を見せるか確かめるのだ。

「この課内会議の書類、10部ほど刷っていただけですか？」

「10部ですね。わかりました。急ぎますか？」

「いいえ、明日の午前までに仕上げて貰えれば……」

「私、時間が空いていますから、今仕上げますね」

仕上げて貰えれば大丈夫ですから、急がなくてもいいですよ。そう緋月が言う前に、朱里はさっさとコピー機の方に足を向けてしま

う。やはり、おかしい。緋月の言葉なら一つも聞き漏らすことなかった彼女なのに、今日は緋月に最後まで言葉をつむがせようとしなかった。

時々窓口に立つては、課内会議の書類をコピーしに行く。その繰り返し。

「緋月さん、課内資料が完成しましたが……」

「あ……ああ、この辺にでもぶん投げといてもらえばいいですよ」「ぶん投げるなんて。でしたら、こちらに置いておきますね」

大量の書類を落とすことなく、しっかりと安定した場所に置く。そのまま朱里は自分のデスクに戻り、窓口で受け取った書類の確認や整理、計算、データベース作成といった作業を続けていく。

すべてが完璧だった。隣の席の相川も、何が起こっているのか理解できずにキョトンとして朱里の様子を見ている。その後、一瞬、ほんの一瞬緋月に恨みがましい視線を送る。

——僕が何かしましたか？

——「これ」、智也君が原因じゃない？

——なんで僕なんですか。

——朱里ちゃんがこんなことする原因なんてそれ以外考えられないんだけど？

目と目で通じ合う、とはまさにこのことなのか。朱里が仕事に没頭しているすぐそばでは、実に静かなバトルが繰り広げられていたのである。

そして時計の針が正午を指した瞬間、スピーカーから機械的なチャイムの音が発せられる。昼休みの合図。皆それぞれに切れのいいところまで仕事を一時中断し、スクリーンセーバーを起動させて食堂に足を向けたり、事務所でカップ麺や弁当を食す者もいる。しかし事務所や食堂で食事をするのはほとんどが男性職員で、女性職員は大抵別室に集まり、噂話などに花を咲かせながら昼食をとるものである。

むろん、相川や下田、朱里もそうである。いつもの部屋でいつものように昼食を。

と思つたら、これまた朱里の様子がおかしいのである。

いつもであれば相当に手の込んだ弁当を自分で作つて持つてくるのに、今日は野菜ジュースの紙パック1つしかテーブルに置いていないではないか。

「朱里ちゃん、お昼ご飯それだけなの？」

「はい、ちよつとダイエットしなくちゃって思つて」

しっかりとした口調は崩すことなく、ちびちびと野菜ジュースを飲み込んでいく朱里。仕上げとばかりにダイエットサプリメントを一粒口にしてみいる。

「でも、もう痩せなくつてもいいんじゃない？朱里ちゃんすごく華奢だもの。それ以上痩せるとちよつと心配だなあ」

「そんなことないですよ？私、前から丸顔なのが気になつていて」

なるほどなあ、と相川と下田は顔を見合せて頷いたものである。

——朱里ちゃんには悪いけど、ちよつと智也君にもお仕置きが必要ね？

——奇遇じゃない、あたしもそう思つてたんだ。

「うーん、どうしても気になるなら仕方ないけど、無理して倒れたらみんな心配するんだよ？」

「大丈夫です、倒れない程度に頑張りますから」

今の時点で頑張りすぎだから、とこつそり突っ込みを入れながら、カップラーメンをすすする相川と下田。

先に仕事に戻ると言つて、昼休みなのにも関わらず、朱里は早々に事務所へ戻つてしまった。昼休みが終わるまで、おそらく朱里はここに戻つてはこないだろう。

そう判断し、どちらからともなく口を開いた。

「しかし……恋する女ほど強いもんはないわね」

「そうねえ。朱里ちゃん、あれはあれでよく似合ってるし……大人っぽくなつたように見える」

「問題はその『見える』ってところ」

ぐいっとスーヴを飲み干し、ため息を一つついてから、相川がポツリと続ける。

「朱里ちゃん、きつと智也君に子ども扱いされたくないから、見かけだけでも、って思ったのかもしれないね」

「きつとそうだと思う。あのときの自棄酒っぷり、目も当てられないくらいだったもの」

「でも、下田ちゃん。変だと思わなかった？」

「？」

下田は二次会の途中、終電を逃さないように早めに会場を後にしたのだが、その頃には朱里はグデングデンに潰れてしまっていた。そこで自分の持っていた朱里の部屋の合鍵を智也に渡し、朱里を連れ帰るように言ったのだ。

「あのときの智也君の様子」

自分もだいぶアルコールが回っていたのでそのときは気づかなかったが、相川に言われて状況を思い返すと合点がいった。

緋月も、いつもより明らかに飲んでいたのだ。

普段ならばあまり酒に手を出さず、潰れた者を介抱したりする役に回る緋月なのに、あの日に限っては溺れるように飲んでいた。合鍵を渡すときも、相当目が据わっていたものだった。

「……さっきから、何をたくらんでいるんですか？」

「別に何も。ただ、朱里ちゃんと帰る方向が同じなら送ってあげていただければと思って」

「どうして僕が……」

「朱里ちゃんが帰り際に強姦でもなんでもされてしまったら、それこそ智也君だけでなく事務所全体の問題になりますよ」

穏やかな下田が珍しく強く出たものだから、半分潰れかけていた緋月もそこではっとしたらしい。正氣に戻り、鍵を受け取り、

「そうですね。事務所だけの問題じゃありませんから」

と、半ば呆れたようにため息をついていた。

事務所だけの問題じゃない。その言葉の裏に隠された意味はもはや明らかだ。

「いい加減、智也君も素直になればいいのにね」

「ホントにね。だいいち智也君、今年でここ3年目でしょう？つてことは3月には……」

「転勤、か」

転勤、で二人の声が重なった。転勤はある意味宿命といってもいいものだ。本人の意思はほとんど介在しないに等しく、いきなり県境から逆側の県境に飛ばされたり、といったこともままある。おおよそ3年に1度ペースで転勤になるのだが、ちょうど緋月はこの事務所に勤めてから3年目に値する。ほぼ転勤は間違いないと言っているだろう。

「朱里ちゃん、相当へこむんじゃない？このままじゃ」

「一番心配なのがそれなのよ。朱里ちゃん、いつも智也君しか見てなかったから」

「そうね……たぶん智也君が転勤になったら、朱里ちゃん、きつと壊れるわ」

そろそろ昼休みも終わりだ。ハロゲンヒーターの電源を切り、休憩室から出るとたまたま緋月に出くわした。おそらく煙草でも吸っていたのだろう。滅多に吸わない煙草を。

第4章

仕事納めの日の朱里は、いつになく体調が悪そうだった。

いつも仕事納めの日になると、料亭から膳が届くのだが、朱里は例によってそれに一口も手をつけようとしなかった。

「今日ぐらいいいんじゃないの？」

「いいえ」

そして、野菜ジュースとダイエットサプリメントを口にするのみである。さすがに緋月もそれに気づいたようで、きょとんとして彼女を見ていた。

「緋月さん、お寿司落ちますよ」

「あ、すみません」

緋月も緋月らしくなく、今日もどこことなく浮ついた様子だった。

話には聞いていたが、まさかそこまで朱里が悩んでいたとは。それも、自分のちよつとした一言で。家でも満足に食事をとっていないのだろう。日に日にやつれていっているような気がした。

「珍しいですね、緋月さんがボーっとしてるなんて。どうしたんですか？」

「……いえ、別に、何も」

平静を装う。朱里が悲しむのはわかるが、ここは職場だ。その辺りのけじめはしっかりつけなければならぬ。それが社会人としての流儀だ。増してこの職場は税務、一般市民にも縁が深い場所。ここで過剰に朱里を心配すると、話に余計な尾鰭がつき、自分の身だけでなく朱里の身までも滅ぼしてしまうことになるだろう。

——終わらせてしまおう。

緋月は誰にもわからないように呟くと、机の横に置かれた大量の書類が詰まった段ボール箱を左手でそつと撫でた。

午後1時にチャイムが鳴ると、緋月はすぐに行動を起こすことにした。

「堺さん」

「はい」

明らかに顔色が悪いのに、朱里は気丈に返事をして、緋月の指示に従う。

「で、ですね。この無効になった免税証を倉庫の金庫に入れておいて頂きたいんですよ。かなり重いですが、大丈夫ですか？」

かなり重い。そこで相川の視線が鋭く光った、いや、開いた口から放たれた言葉さえも鋭く研ぎ澄まされていた。

「緋月さん、ちょっとあなた……」

「これは僕が頼んだ仕事ですから、相川さん、あなたはあなたの仕事に集中してください。これは堺さんの仕事です」

緋月だって負けてはいない。自分の目論見だけは崩されなくなかったのだ。

「……無理だけはさせないくださいね」

普段は穏やかな緋月の、冷酷な口調。生真面目そうな彼の外見もあいまって、相川はそれしか言えなかった。

「あ、あの……」

「大丈夫ですよ、お願いします」

一転、不安そうな朱里にはいつもの穏やかな笑みで応じる。そして、20キロ近くはありそうなダンボール箱を彼女に託した。

——大好きな緋月さんが、私にお願いしてくれたのに……。

倉庫は庁舎の最上階、4階にある。しかもこの建物はつくりが非常に古く、エレベーターなどという文明の利器だって存在しない。ひたすら重いダンボールを引きずって、4階まで行くことになる。途中何人もの職員に声をかけられたが、朱里はただひとこと、「大丈夫です」それだけ口にして、限界一步手前の体を段ボール箱と一緒に引きずる。

「それに、エレベーター使わない方が運動になるもの……」

自分のいつもの声とは明らかに違うが、知らないフリをする。それもこれも全て、大好きな緋月のため。

やつとのこととで4階の倉庫にたどり着いたのに、もう身体は思うように動いてはくれなかった。しっかり持っているはずの段ボール箱が、また床に大きな音を立てて落ちる。この階は倉庫や金庫しかないので別段ほかの事務所の邪魔にはならないのだが、あまりにも静かなこの場所での大きな音は彼女を酷く驚かせた。

もはや、段ボール箱を持つほどの体力は彼女にはなかった。

文字通り段ボール箱を引きずって、倉庫のドアを開ける。金庫は倉庫の中の一番奥を陣取っているから、朱里の体力が尽きるのが先か倉庫に着くのが先か、である。

——無理、しすぎてるのかな、わたし。

忘年会で子ども扱いされたのが悲しくて悔しくて、大人の女に変わろうと決意した。美容室で髪を規則ギリギリの色にしてふんわりとしたカールを巻いたのも、それまで乗っていた古いけれど可愛い軽自動車売り払って新しい車を買ったのも、ダイエットを始めたのも、全ては緋月のため。

緋月のためなら何でもできると思っていたのに、これじゃあ形なしだ。

ふと、何も見えなくなる。視界が暗くなって星が舞っているようにも思える。同時に倉庫のドアを開ける音が遠くで聞こえた。倉庫のドアは彼女の真後ろにあるはずなのに。

背中に鈍い衝撃。そこで視界がぱっと開け、元に戻る。

「まったく、あなたって人は……」

そこにいたのは緋月。倒れかけた朱里をしっかりと抱きとめていた。その手元には売店のおにぎりを携えて……。

第5章

「本当はこんなことすると僕が叱られるんですけどね」

腕組みをしながら、おにぎりを食べている朱里に言う。謝ろうとする朱里を制し、

「ダイエットもほどほどにしておいてくださいね。今のままで十分華奢なんですから。ほら、食べてください」

などと言う。

「でも緋月さん、どうしてわたしがこんなことになったのか……」

「わかりますよ、そのくらい」

どちらの意味の「わかりますよ」なのか。さすがに朱里も堰が切れたようだった。

「誰のためにこうしたのか、緋月さんはわかりますか？ 髪形も服も、車も替えた、傍から見たら無茶なダイエットもした、それが誰のためなんだか……」

朱里らしからぬ感情の爆発。今まで一度も目にしたことがなかった。彼女はいつも温厚で少しドジで、それでも一生懸命に仕事をしていた……。

——ああ、そうか。そういうことが。

全ては緋月のためだったのだ。

「仕事に一生懸命だったのも、そういうことだったんですか？」

「わたしは職責を全うしているだけです。でも……」

「僕のことを、好きになってしまったから。だからこんなことになってしまったんですよね？」

蒼白だった朱里の頬が一気に熱を持つ。緋月にはお見通しだったのかと焦る彼女にさらに言葉を重ねる。

「どうして僕が貴女の教育係を引き受けたか、知らないでしょうね、堺さんは」

「……へ？」

ぽかんと口を開けたままの朱里に、さらに衝撃的な言葉が襲いかかった。

「僕も貴女と一緒にだったんですよ。貴女と会話をする機会を少しでも増やしたかったから、自分から課長に頼んで教育係をさせてもらうことになったんです」

そこで一瞬だけ言葉を切り、

「堺さん。ずっと貴女のことしか見てませんでしたよ、僕は」

「緋月さん、あの」

続きは言わせなかった。言葉など要らなかった。

抱きしめる腕の力が強くて、痛い。それでも朱里は嬉しかった。

初めての恋がこんな形で実るのは小説の世界での話だけだと思っていたが、事実は小説より奇なり、だ。

「あの……好きです」

断られるのが怖くてずっと言えなかった言葉がやっと言えた。嬉しくて涙まであふれてくる。

結局金庫の仕事は緋月が手伝ってくれたおかげもあり、思いのほか早く終わった。いずれにしてもいつかは必ずやらなければいけない仕事だったのだ、助けがあると嬉しいものである。と同時に、書類を溜め込むのは絶対にやめようと決心した朱里であった。

一方の緋月は、この日のためにわざわざ返納された免税証を事務所に溜め込んでいたというから狡賢いことこの上ない。

さらに倉庫での会話を廊下越しに相川と下田に聞かれていたことは、結局二人は知らないままだった……。

倉庫からは別々に戻ることにする。

朱里はそのまま事務所に戻って、回ってきた書類を精査してはんこを押していく。緋月は売店で缶コーヒーを買ってから事務所に戻り、急な外回りの準備に追われていた。

職場では恋人同士だということは内緒にしよう、という二人の意

思からである。

もつとも、相川と下田のせいで、二人が戻ってくる頃には全ての事情が事務所中に知れ渡っていたのだが……。女の噂話というのは恐ろしいものである。

どんどん回ってくる回覧や決裁に追われ、結局朱里は残業することになった。

他の皆は仕事納めということもあり早めに帰ったため、事務所には朱里一人だった。厳密にはまだ外回りから帰っていない緋月と課長もいるわけだが。

時計の針が7時半をさした頃、課長と緋月が雪を被って帰ってきた。

「お疲れ様ですー」

「お、堺さんじゃないか、まだ残ってたのか。もうそろそろ帰ってもいいぞ」

課長の言葉に軽く頭を下げて応える。が、次の言葉に一気に顔を耳まで真っ赤にする。

「なんなら緋月君と酒でも飲んで来たらどうだ」

第5章（後書き）

構想から何年たったでしょうか。爆

文章も大幅な加筆修正を必要としましたし。がんばった私。

そういうわけでこっちを読み終わったあとに「ふたり」を読んでいただく、更にお話が楽しめるかと思います。どうぞよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9404p/>

きせき

2011年4月27日19時11分発行